

歴史をつくるのは誰か

下放、すなわちスタイルの根底的転換＝文体革命を！

前田年昭

歴史をつくるのは誰か——下放、すなわちスタイルの根底的転換＝文体革命を！

前田年昭

東日本大震災、とくに東京電力福島第一原子力発電所の事故は、日本の学問のあり方を浮かび上げさせた。「専門家」の多くは、炉心溶融の事実をなかなか認めず、また被曝放射線の法的規制基準を緩めて被害を小さく見せようとする傾向があり、そればかりか「大丈夫」「ただちに健康に影響しない」と強調することによって人びとの避難を遅らせ被曝を広げた。資本と国家のしもべとしての彼らの実態は「素人」の前に明々白々となった。雑誌は「科学は誰のためのものか」を特集し、科学技術と社会との関係をめぐってシンポジウムや討論会が開かれた。問われているのは学問は何のため誰のためのものかである。

スタイルの根底的転換がいま、求められている。スタイルとは、人相風体というときの風であり、『風姿花伝』の風姿であり、文体(文風)であり、生き方を貫く発想の型である。

問題は原子力工学や放射線医学だけではない。現在の「専門家」による学問には批判精神はない。

御用学問と指弾され批判を浴びた立場と内実が、原発事故を機に一気に全面的に露呈したのである。

学問が中立だといふかんがえ方は根本的に誤りである。中立などはなく、被害者でなければ加害者であり、第三者という言い訳は加害者の隠れみのにすぎないからである。また、専門家はしばしば素人を恫喝して「応用は基礎の上に成り立つ」というがこれなどヒエラルヒー固守のための詭弁にすぎない。どのような目的にも奉仕しうる基礎が、応用とは別個にありえようか。何のため誰のためのものかという目的意識と能動性がすべてを貫いて決定づけるのであり、その応用のなかに基礎があるのである。

いま、歴史と社会が日本の学問に求めているものは何か。それは、目的意識と主観的能動性についての全体的哲学であり、スタイルの根底的転換、文体革命であると私はかんがえている。

その手がかりを人類史に求めれば、中国革命と中国文化大革命の歴史的経験のなかにある。革命の犠牲の大きさを前にたちすくむ意見や、結局は敗北したではないかという意見もあろう。しかし、ある哲学者がいったように「失敗しない人は何も仕事をしない人である」。苦い「敗北」は終わりではない。生きることは闘いであり、たとえ「敗北」を何度繰り返そうとも抵抗をつづけること以外はない。この「敗北」が社会を変えるためのこやしになっていくのである。歴史とは過去から批判的に学ぶことである。

中国革命はまさしく文体革命であり、スタイルの革命だった。革命前、人びとはイギリスや日本、フランス、ドイツなどの植民地支配下で、人間としての尊厳を奪われ、言葉を奪われていた。噴きだ

す^と呐喊には呻吟する沈黙が張りついていた。抵抗は文体革命として始まった。五四白話文運動で句読点(中国語では標点符号という)を発明し、分かりやすい文体を広めた。わざと難しい言い回しをする知識人を鼻つまみにし、阿Qたち(流動的下層貧民)は武器になる活きた文字と言葉を取り戻していった。

毛沢東は、国内「難民」としてもっとも卑しまれ蔑まれた遊民を「兵」として訓練し、社会でもっとも尊敬される人間類型として組織し、また人民公社をつくって食べるようにした。それは、文字と言葉を奪われた阿Qたちが文字と言葉を取り戻す革命だった。三大紀律八項注意を歌って言葉を覚え、生活スタイルを変えていった。識字運動であり、訴苦運動という翻身革命だった。

毛沢東が、近代西欧の個人主義やアナキズム、マルクス主義から出発して「大同」を主張し、社会の最下層の遊民、外村人、工人階級を教育、組織し、強力な解放軍として団結させ、自分たち自身の生き方の変革を社会変革と一体にすすめるスタイル(風)をつくりあげていった底流には、墨家の思想があった。墨子は「防禦」から出発する弱者のための軍事論を創り上げた思想者である。永くつづいた科挙体制下で抑えられてきた劣等生、ハンパ者の生きる思想として墨俠精神は宮々と受け継がれていたのである。

一九四九年、中華人民共和国成立。しかし革命を政権奪取に切り縮めた輩が特権階級になっていく。学校出の党幹部、官僚が幅をきかせていく。多く早く、という欧米の情報革命の風が吹き、人びとは革命の原点を忘れた。毛沢東とその党は革命の原点に立ち戻ろうと呼びかけ、社会主義教育運動を

まず農村から起こし、次いで、差別競争と消費におぼれつつあった都市へと広げていった。文化大革命である。何億冊も刷られた『毛主席語録』を繰り返し読み、読み変え、繰り返し書き、書き換え、繰り返し組み、組み換える文化革命だった。

劣等生・青二才・素人の、優等生・権威・専門家に対する抵抗戦争だった日本の全共闘運動のなかで、私は毛沢東による文化大革命としての文化大革命を日本文化大革命の号砲として受け取った。下層人民による点検を受け、下層人民からへものを見る目、感じる心_レを学ぶために下放した。私と同様、文化大革命に影響をうけて今なお下放の途上にある人びとは少なくない。進学率が高まる反面で、大学卒一辺倒の価値観を選ばない_レ草莽_レの人びとが拡大している事実はその証左である。

毛沢東の死後、墨俠精神は投げ捨てられ、党は変質し、国家と社会は変色した。第二、第三の文化大革命は必然である。

現下の切実で焦眉の基本問題は依然、情報処理革命か、それとも文化大革命か、と立てられる。

多く早く_レの強迫観念に囚われた情報処理革命は、情報過多と外部メモリ依存によって実のところ鈍く狭く_レなった。目を拡張した結果、目が弱っちまったという訳だ。耳を拡張した結果、聴き取る力が萎え、闇夜を生き抜く五感は衰弱した。ものを視る目、感じる心、かんがえる力を奪い返すために情報遮断も必要である。情報の海におぼれる前に、時に情報を断って引きこもって自身を見つめ、自身の五感を確かめる時間と空間を持つこと。

東京電力福島第一原子力発電所の事故に対して、マイクロシーベルトやミリシーベルトなどのにわ

か仕込みの知識を振り回して語られる正義が「市民の科学」でありえようか。そこには被害者意識はあっても社会の主人公にふさわしい自省が欠如してはいないか。いま必要なことは、自らが東電社員だったらどうすべきかと想うことである。自らを「騙された被害者」として措定することからは抵抗の力を生み出すことはできない。騙されたと嘆くものはこれからも何度でも騙されることだろう。万年野党的な奴隷根性を正し、発想を転換する文体革命は、日本の変革にとって切実で焦眉の課題である。⁽¹⁾

ここに紹介するふたつの講義録は、スタイルの根底的転換を！との立場からなした、現在の日本の高校生と大学生に対する私の問題提起である。

「学問の目的は、自然と社会と自分自身を主体的に変革するために必要な知識と力を得ることである」は、二〇一一年六月一日、この年度の神戸芸術工科大学(神戸市西区)で担当した組版講義をはじめにあたって「情報デザイン論」(二年生)の冒頭に述べた「学問とは何か」という講義の内容をまとめ直したものである。

この講義のあと、「世界の用字系と文字の排列方向」というテーマで、新型核爆弾による第三次世界大戦の三七年後の世界を描いた大友克洋の傑作漫画『AKIRA』の日本語原作と英文版を比較して学んだ。見開きの右から左へ進む日本語版に対し、英文版は左から右へ進む。文字の排列方向についての先行研究には宮崎市定「歴史的地域と文字の排列法」(『アジア史研究 第二』東洋史研究会、一九五

九年)がある。宮崎はここで「どちらでもよい事が、どちらかに決定されているという事実の持つ意義」を強調している。

日本の学問は、日常性から遊離した特殊性のタコツボを自慢とメシの種にして腐ってしまった。ある哲学者が指摘したように「もつとも単純な、もつとも普遍的な、もつとも根本的な、もつとも大衆的な、もつとも日常的な、何十億回となく繰り返される関係」は変革の前提たる現状分析の土台である。

また、翌六月二日の「編集・表現論」(三年生)の冒頭でもこの学問論を述べた後、書法から活字へ」というテーマで文字デザインが歴史と社会、技法と書体ごとにそれぞれ特徴を持つことを学んだ。

「学問論 私はなぜ四〇年前に母校を中途退学したのか」は、二〇一一年一〇月一日、二四回生中途退学生として私が灘高校(神戸市東灘区)土曜講座で話した内容をまとめ直したものである。土曜講座では、東京電力福島第一原子力発電所の事故を二六年前に予感したかのような森崎東監督の傑作映画『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』(キノシタ映画、一九八五年)を上映した後、母校と恩師の思い出も交えて学問論を講義、その後、後輩たちからの質疑を交えて討論を行った。

『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』からは、社会の変革は自分自身の変革と一体のものとしてしか実現し得ず、そのためには、つねに「下放」しつづけることが必要だと学ぶことができるのではないだろうか。

参考文献

前田年昭「革命犯罪」としての大逆万歳！ 奴隸根性を正す文体革命を訴える」二〇一〇年十二月二十六日『アナキズム』第一四号(特集・テロル)、『アナキズム』誌編集委員会、二〇一一年九月) <http://www.jimelabo.com/taigyaku2010.htm>

学問の目的は、自然と社会と自分自身を主体的に変革するために必要な知識と力を得ることである

神戸芸術工科大学「組版講義」第一講

私の担当講義を始めるにあたり、学問とは何かについての私のかんがえを自己紹介を兼ねて話しておきたいとおもいます。

私は四〇年前に高校を中途退学してから——途中何年かの自営業をはさんで——ずっとフリーターをやってきました。数年前にドイツへ行く機会があったのですが、その時に見聞したことは、私が高校を中退した動機はけっして間違っていないかつたかと再確認するに充分なことでした。

ハイデルベルクはドイツの学園都市です。ここ神戸の学園都市に神戸芸術工科大学があるように、ハイデルベルクもまたドイツで最も古いプレヒト・カール大学ハイデルベルク(通称ハイデルベルク大学)をはじめ、ハイデルベルク教育専門大学など大学や研究機関が多く、伝統ある街です。街を歩くと素敵な古本屋さんもあります。街を象徴する川、橋、城がとても美しく印象的でした。

びとの立場に立つのではなく、資本と国家のしもべでしかないのです。

私が小学生のころ暮らした尼崎は四日市とならぶ公害都市でした。近くの神崎川は真つ黒でくさく、ガスがぶくぶく噴き出ていましたが、当時つくられた小学校の校歌は「かがやく朝の学びやに太陽のような夢がある」「みどりの風の吹く窓にはずんだ若い声がある」というもので、私にこの社会の嘘と不正をかんがえさせるきっかけになりました。

中学に進学したころ、全国の大学や高校で全共闘運動が始まりました。東大を頂点とする、資本と国家のしもべとなった学問のあり方を問い直す闘いと運動でした。ベトナム戦争でベトナムのんびとがナパーム爆弾で焼き殺されるとき、侵略したアメリカの爆撃機は日本にある米軍基地から飛び立っていく。私たちは第三者でありえようか。被害者でなければ加害者ではないのか。学問は誰のため何のためのものか。付言すれば、これは他者を断罪するための倫理などではなく、自省と変革のための視点です。たとえば、己を何ひとつ罪のない被害者として措定するのではなく、自らの加害性を追及し自覚するためにも自身が東電社員だったらどうなのかと考えることです。なぜなら、自己変革を伴わない社会変革など百害あって一利なし、だからです。

四〇年前も今も、私たちが問いつづけているのは、資本と国家による加害に加担しつづける東大御用学問体制です。四〇年前の全共闘運動は、東大入試を一年間中止させたほど東大御用学問体制を批判し、揺るがしました。私も高校で全共闘運動を闘いました。私は、歴史学の研究者になりたかったのですが、御用学問の腐敗の深さを知るにつけ、在野で生きようとかんがえ、中途退学し、農業や土

木建築、港湾荷役、製造業の下請け、日雇いの仕事をやりました。ここ三〇年ほどは編集、組版、校正などを中心に本づくりの仕事に就き、現在にいたっています。

私は学生の本分は学生運動だとかんがえています。学生運動といえば、デモや集会をやったりピラを配ったりすることが浮かぶかもしれませんが、それはほんの一部でしかありません。学生運動でもっとも大切なことは学問をすることだと私はかんがえています。資本と国家のしもべではなく、実際に苦難を負っている人々のための科学、医学、技術を学び、打ち立てること、そのために、現在の専門家による御用学問を批判することです。経済学ではなく経済学批判を、デザイン教育ではなくデザイン教育批判をやることです。

学問とは何か。私はまだかんがえつづけている途中ですが、今のところ次のようにかんがえています。

学問の目的は、自然と社会と自分自身を主体的に変革するために必要な知識と力を得ることにある。人間が自然を改造し(自然科学と生産闘争)、新しい人びとが旧い人びとを批判して社会を改造し(社会科学と階級闘争)、そうして自分自身の生き方を変えていく(人文科学と思想闘争)、そのためには先人たちが残した知識を学ぶことも必要ですし、それだけでなく、その知識を生かす力も必要です。力とは何か。ものを視る目、感じる心です。ものを視る目、感じる心がなければ、いくら書物を読ん

でも役立てることはできません。

人間は直接経験だけでなく、間接経験からも学ぶことができます。東京電力福島第一原子力発電所の事故で強制的に避難を余儀なくされて仕事も生活も奪われ、苦難を負わされた人びとのことを心におもい、目を世界に向けて学ぶことが重要だとおもいます。

デザインでいえば、技術に使われるのではなく、人間が技術を使うということです。コンピュータは人間の感覚や作業の延長として、見たり測ったり数えたり、さまざまなシミュレーションをやる道具です。ですがたとえば、なぜ、そこにその文字をそのサイズで配置するのかをかんがえることなくソフトウェアの操作方法だけを覚え込んでよいものをこしらえることはできません。

東日本大震災で地震と津波を体験した子供たちは風呂もプールも怖がるようになったといえます。子供たちの安心と安全を取り戻すような街と生活のデザインが今こそ求められています。また、原子力発電所の過酷な被曝労働を支えている下請けや日雇いの労働者の防護服がなぜあのような暑苦しく非人間的なものなのか。デザインは、いったい誰のため何のためのものかが問われているのだとおもいます。

ここで大切なことは、すべては疑いうる、という批判精神です。意見やかんがえが違うからといってレッテル貼りをするのはよくないことですが、違いを追究すると「対立」になるからといって討論を避けたり、なあなあにすませたりするのは、あの意義深い全共闘運動の「負の遺産」だとおもいます。政治党派が袂を分かつのはありでしょうが、学術団体や大衆組織まで分裂させてしまつて、発展

の契機としての相互批判と対話の場を狭めたことはよくないことでした。今こそ、広く深く討論をする習慣を取り戻す必要があるとおもいます。

「すべては疑いうる」という批判精神はすべてを疑えというニヒリズムやシニシズムとは違います。私の講義に対しては同様です。聴いたことをそのまま覚えるのではなく、「すべては疑いうる」という批判精神をもって聴いていただきたいとおもいます。

参考文献

前田年昭「装丁／ブックデザイン／書物はだれのものか」(『ユリイカ』二〇〇三年九月号(特集・ブックデザイン批判)) <http://www.linelabo.com/bookdesign.htm>

前田年昭「組版の哲学を考える〜規範的ルール観からの解放を〜」(『Windows DTP PRESS』vol. 8、技術評論社、二〇〇〇年八月) <http://www.linelabo.com/wdtp0008.htm>

前田年昭「技術が(人間と労働)にもたらしたものの問いかけ〜歴史のなかの知恵蔵裁判〜」(鈴木一誌+知恵蔵裁判を読む会編『知恵蔵裁判全記録』、太田出版、二〇〇一年一月) <http://www.linelabo.com/chie0011.htm>

学問論 私はなぜ四〇年前に母校を中途退学したのか

灘高校土曜講座講義

きょうここに、中途退学者という「はみ出し者」「裏切り者」の話を知るといふ不思議な場に来て

くださった後輩の皆さん、そしてこの場を許容してくださった土曜講座担当の母校教員の皆さんに心からお礼を申し上げます。

私がなぜ皆さんに「学問論 私はなぜ四〇年前に母校を中途退学したのか」という話をしようと思つたのか。それは、福島第一原子力発電所をはじめ東京電力、また経産省などに母校の卒業生が少ないと伝え聞いたからです。個人々人を責めているわけではありません。進路と職業の、さらに現在やつている勉強の持つ社会性についてとにもかんがえてほしいと思つたからです。

私が中退した理由、その結論を先取りしていえば、四〇年前に灘高でも闘われた全共闘運動のなかで、悩み、かんがえ、中途退学したのです。

話の性質上、私事にわたることをお許しください。私は灘中学校・灘高等学校には尼崎市立園和小学校から入学しました。小学生のころは、地図と年表の好きな少年でした。校区の園田は、大阪平野を流れる淀川水系のひとつである猪名川が藻川と分岐し、また合流する、その間に挟まれた周囲一〇キロほどの中州です。ところが当時の地図では、猪名川から藻川にはつながっているのに、同じ名前の猪名川にはつながっていない。いったいどうなっているのか、川は地中を潜っているのだろうかとか、河川改修前の藪の中の探検に夢中になりました。

何か調べるといふことの楽しさは、知ることやわかることの楽しさもちろんですが、それ以上に、別のわからないことが出てくることにあります。学問の動機はここにあると、私はおもっています。

また当時夢中になったのは教科書の間違い探しです。人名や歴史の年代がちがうとか国連加盟国の数が違うとか、見つけては教科書会社に手紙を書き、返事をもらいました。何度もやっているうちに、何だかつまらなくなりました。個々の正しさ(知識の断片)を積み重ねても、私が求める正しさには到達できないと思えたからです。

正しさはどうすれば得られるのでしょうか。

五年生のとき、近所で田能遺跡が発見されました。弥生時代の大規模な集落跡だったのです。毎日のように発掘作業を見に行きました。古代の人々の日常生活が目の前の遺物という実在で裏づけられることに興奮しました。^②

一九六六年春、灘中学に入学。中学の三年間はちょうど、全共闘運動の三年間、中国の文化大革命の三年間と重なっていました。^③

慈達雄先生(日本史)からは実証ということを教わりました。実在と記述は違うということ、基礎としての史料批判が重要だということです。出澤茂先生(地学)からは、自然の階層性を教わりました。階層が異なれば貫かれている法則も違うということです。

出土した土器をどうみるかによって、歴史の記述は変わってきます。炭素一四年代測定法というのがあります。自然界に存在する炭素一四という放射性元素の半減期(五七三〇年)をもとに遺物の年代を計算するわけです。ですが、海岸に近いところでは内陸より数十年以上古く出るなど誤差があり、補正しなければなりません。もともと三万年や四万年を測るものさしである炭素一四年代測定法の測

定限界ともいえます。ここでも、わかることの進展からさらなる新たなわからぬことへの連続があります。

一九六九年、中学から高校に進んだこの年は、私が中退、下放を決心した出来事に出あった年でもありました。

一月の全共闘と警察との安田講堂攻防戦を東大闘争全学共闘会議や全国の闘う青年学生と共に闘ったML派(日本マルクス・レーニン主義者同盟・学生解放戦線)は、東大の正門に毛沢東の肖像を掲げ、「帝大解体」「造反有理」と大書し、「一月激闘を五四運動の地平とせよ」と呼びかけました。私は歴史を研究するには歴史発展の原動力としての「民衆の造反」の立場に立たねばならないとおもいました。^④歴史は研究対象であると同時に自らも参加して主体的に変革を担う対象だと確信したからです。

同年春、阪神工業地帯の中心である尼崎市で、阪本勝・薄井一哉の後を継ぐ「革新」首長のエース篠田隆義は『尼崎の戦後史』(『尼崎市史』別冊)の発行を差し止め回収、これに抗議する市民運動との出合いは、私に「革新」の欺瞞性を教え、言説ではなくどう生きるかという観点から物事を判断することを教えました。^⑤

『歴史学研究』一二月号に掲載された嶋本信子の論文「五・四運動の継承形態」は、前述の立場と観点に立つ歴史研究の方法とはどのようなものかを事実を通じて教えました。五・四運動は一九一九年に起こった民衆叛乱として中国現代史の原点であり、同時に、闘った青年学生がその後下放していた起点でもあります。^⑥

一九七〇年、国際博覧会史上アジア初で日本で最初の国際博覧会、日本万国博覧会が「人類の進歩と調和」を掲げて大阪で開かれました。公害や医療、教育など社会の矛盾が噴きだしていた当時、「進歩と調和」をうたうことは対立と矛盾をおおい隠し、ごまかすことにしかならないと私はおもいました。高校一年生だった私は、近代主義と技術万能論に反対して万博反対デモに参加、逮捕されました。この万博で商用原子力発電第一号として関西電力美浜発電所から会場に送電された「原子の灯」が大々的にもてはやされたことは記憶しておくべきこととおもいます。

私が全共闘運動のなかで学んだことは、すべてのことは関係しあっており、第三者などなく被害者でなければ加害者なのだということです。ベトナム人民を殺しにアメリカ軍の爆撃機が出撃していくのが日本の米軍基地だということは、これを何もしないでみすごすということは、日本の人びともアメリカの人殺しに加担していることになるのではないか。日本でのベトナム反戦運動の昂揚の背後にあったのはこのような気持ちでした。第三者として何もしないことが実は、一方の加害者を支えている——こうした関係は、ベトナム戦争でも水俣病や東電福島第一原発事故でも同様です。

研究対象に対して研究の主体は「距離」を持ってといわれるのは、たとえば、試験管を持つ自分の手の温度や湿度が対象に影響することに自覚的であれということです。

しかし、人間は自然のなかにあり自然の一部ですし、新しい社会は、旧社会の意識や習慣に染まった自分自身から、自ら脱皮するように自己変革して生まれていきます。歴史を研究するといっても、歴史研究の主体である自分自身もまた歴史をつくる民衆のひとりなのです。対象にふれずに対象を知

ることはできません。対象にさわり、参加することなしに、対象を研究することなど不可能です。

歴史を知ろうと思えば歴史を創造する民衆の社会運動に参加しなければなりません。科学も技術も、だれにでも奉仕する中立の道具などではありえません。研究主体の立場、つまり目的、動機と志という主観的能動性が、研究の性格を決定づけるからです。何のため誰のための研究なのか研究の性格を決めるのです。

ここで、全共闘運動から学んだこととして先に述べた、第三者などありえず、被害者でなければ加害者ではないのか、という問いかけが決定的に重要な意味をもってきました。

世の中には「不偏不党」や「公正中立」を標榜するジャーナリズムやアカデミズムが存在しますが、対立する階級から成り立つこの社会のなかでの人間の営みである以上、その対立の局外に存在することなどありえず、科学や技術は元来党派的なものなのです。党派的事であること自体はよいことでも悪いことでもなく、ありのままの現実です。問題は、どの党派、すなわち、どのような人々の要求を背景に持っているのかにあります。

この立場から、四〇年前の灘高における全共闘運動をふりかえったとき、もうひとつの事実にあふれておかなければならないでしょう。それは、私に自然の唯物弁証法を教えてくださった出澤先生が、残念なことに、私たちの灘高闘争に敵対されたことです。共産主義といひ唯物弁証法といつてもひとつではなく、そこにも異なるかんがえ方があることを私は学びました。

私は、在学時もつとも大好きだった恩師、長光實先生(数学)のことをおもひ起こします。長光先生

は私たちサッカー部の顧問をされていました。昔、といっても一〇年ちよつと前まではフ、アイ、ブ、テ、ッ、ブ、というルールがあり、ゴールキーパーはボールを保持したら四歩までしか歩けなかったのです。ある対外試合で長光先生は夢中になってフォーステップフォーステップと叫んだのです。授業で使っていた参考書がフォーステップという名前だったのです。長光先生にはこんな素敵な忘れられないエピソードがたくさんあります。

学問も社会運動も人間の営みである以上、最後を決するのは人間であり、人間が決めるのだとおもいます。

人間の認識はどのように進み、正しさはどのように得られるのでしょうか。

それは、人間の頭のなかに生まれたときからあるのではなく、人間の生きるための闘い、つまり社会的実践のなかからのみ生まれるのだと私はおもうようになりました。

人間が自然を改造し（自然の改造と変革）、新しい人びとが旧い人びとを批判して社会を改造し（社会の改造と変革）、そうして自分自身の生き方を変えていく（思想の改造と変革）——この三つの社会的実践のなかから正しい思想が生まれるのだとおもいます。

四〇年前、何のため誰のために勉強をするのかを自他に問うた全共闘運動のなかで私はかんがえませんでした。目の前にある学問、大学は、資本と国家のしもべではないのか。私がやりたい学問はこんなものではない、私がやりたい歴史学はここにはない。そうかんがえた私は高校三年生の一学期に中途退学しました。学校から処分されたのでも何でもなく自らやめて「下放」したのです。

「下放」とは、中国の文化大革命のなかで言われた言葉です。文化大革命は、都市と農村、工業と農業、頭脳労働と肉体労働という三つの差別の撤廃をめざした実験でした。そこで知識青年たちが、農村へ赴き肉体労働を通じて、自らの古い思想を点検しようとした運動、それが「下放」でした。

私の下放への決心を励まし支えたフランツ・ファノンの言葉を皆さんにおくり、私の話を締めくくりたいとおもいます。ファノンは『地に呪われた者』（みすず書房、一九六八年）のなかで次のように述べました。

能率を語らぬこと、（仕事の）強化を語らぬこと、（その）速度^{リズム}を語らぬことが重要だ。否、（自然への）復帰が問題ではない。問題は非常に具体的に、人間を片輪にする方向へ引きずってゆかぬこと、頭脳を摩滅し混乱させるリズムを押しつけぬことだ。追いつけという口実のもとに人間をせきたててはならない、人間を自分自身から、自分の内心から引きはなし、人間を破壊し、これを殺してはならない。

否、われわれは何者にも追いつこうとは思わない。だがわれわれはたえず歩きつづけたい、夜となく昼となく、人間とともに、すべての人間とともに。

参考文献

前田年昭「死者は生者を捉え、妄想は遅れてきた全共闘を走らせた」（『ユリイカ』二〇〇五年二月号）特集・

野坂昭如) <http://www.linelabo.com/nosaka0512.htm>

注、あるいは紙の記念碑

(1) カルチュラル・スタディーズ 文化研究の分野だけでなく社会運動、政治運動の分野でも「紋切り型のスローガン」「ただのアジテーション、プロパガンダ」をこき下ろすことは近年、ひとつの定型(ステレオタイプ)となった感がある。が、これは下層人民の闘いの歴史的経験に反している。スローガンやアジテーション(煽動)、プロパガンダ(宣伝)は、人びとが生きるための武器になる言葉の粹、エキス、真髄である。事実、全共闘運動と文化大革命の時代はまた、詩の時代であり、アジテーションの時代であった。生きているうちに、もう一度あのような面白い時代をみてみたいという思いは強まるばかりである。

「さよふもあちらこちらで命は消える、はずなのにどこを歩けど落ちてなどいないなあ、きれいな好きにほほががあるよ、ほんとさ」(RADWIMPS「狭心症」)。氾濫する言葉に文脈や歴史が喪失してしまっているいま、生きた言葉を取り戻さなければならない。戦後民主主義がいくら「かけがえない個性」幻想で洗脳しようとも、「いつでも取り替え可能な」下層人民が(ひとつの言葉)を手にすることが、解放への第一歩である。一九七〇年代後半以降「政治性を捨象する霧」が学問から社会運動までたちこめている。蓮實重彦らの批評は、全共闘運動の敗北の表現なのである。結果、蔓延する「組織嫌い」「政治嫌い」は、保革共同支配を支える奴隷の論理、なれあい主義の温床となっている。学問から社会運動まで、その内部から「組織嫌い」「政治嫌い」を克服、清算し、社会の主人公にふさわしい組織と政治を取り戻すことは急務である。

(2) 田能遺跡の発見は、尼崎、伊丹、西宮三市共同の工業用水園田配水場の建設工事でブルドーザーが泥土から掘り起こしたのがきっかけだった。これから四年後に大阪で開かれる万国博覧会が「人類の進歩と調

和」を掲げなければならぬほどの、がむしゃらな、調和なき開発——社会矛盾の激化はここにも現れてきた。毎日新聞は発掘の模様を次のように伝えた。

遠慮なしに泥土を掘り起こすブルドーザーに追い回される調査で、あるときには「のかないとひき殺すぞ」とブルドーザーの運転手にどなられた調査員もいた。遺跡の発掘調査はひとにぎりの土塊を、丹念に除きながら、土質の変化や、土器など遺物を見出していく地味な作業である。一方で、コツコツ調べていると、すぐそばからブルドーザーが、機械力にものをいわせて、どんどん掘り起こし、くだいていくような状態では、十分な調査などできようはずがない。一〇月三〇日、たまりかねた村川(行弘)調査団長が、日本考古学協会秋季大会に乗り込んで、応援を求めたのもムリのないこと。この間に、土器群はじめ石器類はどんどん発掘され、一月二二日夕、ついに日本で初の人骨入り弥生式木棺がみつかった。

(毎日新聞尼崎支局編『田能遺跡』毎日新聞社、一九六六年二月)

(3)

佐々木幹郎は『季村敏夫詩集(つむぎ唄 泳げ)附録』(砂子屋書房、一九八二年四月)に、季村のこの第三詩集に寄せた「ここにこい、ここへ」という一文を書いた。

十二年という時間は何であったのか。わたしにはうまくいうすべがない。「決着つかず」というタイトル詩の詩篇が季村敏夫の第二詩集にはあり、今度の詩集でも「醒められぬことに醒め」という、自問ではじまり自問で終わる詩篇が収められている。そこでも

決着つかず! という

夕刊神戸の題字が

すりたてのまま句ってくる

と彼は書いている。「決着つかず」とは、六〇年代末から七〇年代初頭にかけての大学闘争の帰結についてか。むろんそれが「決着」のつかないものであったことはいうまでもない。しかし、その敗北の

経験と悲痛に抱擁することからは何ものも生まれてきはしない。重要なのは大学闘争や全共闘運動という言葉の内にはない。その言葉を出すことによつて何ごとかを名ざしたつもりでいる者は、全てくだらない。「この世には名づけられていないものがたくさんある。名づけられてはいても説明されたことのないものがたくさんある」(スーザン・ソントグ)。大学闘争もそのようなものの一つであるにすぎない。

*

藤純は「私たちの世代の精神史を書きたい」としてまとめ上げたフィクション『十七歳 1971』の冒頭、作中人物・穂積(旧姓西川)栄子の手紙に託して、次のように書いた。

六〇年代末から七〇年代初頭にかけてのあの時代。L高校で、いったい、私たちは何をしていたのでしょうか。一時代の単なる「喧騒」と言つてしまえばそれで済んでしまうのかもしれませんが。でもそう言つて片づけてしまうには、あまりにも苦しみに満ちた、そしてまた、あまりにも魅力に満ちた時代だったと今でも正直に感じられます。(……)あの頃の自分の真剣さがとても懐かしいのです。もしかしたら、そうした問題それ自体よりも、自分がそうした問題を巡つて真剣に苦しんだというの方が、今の私にとつては重要なことなのかもしれません。私の心の底にこんなにも深く刻まれたあの頃の「匂い」は、自分自身の真剣な苦しみの記憶として生々しいのかもしれませんが。本当に苦しかったし、本当に楽しかった。できることなら、あの頃の自分にまた戻りたい。(……)本当に左翼運動の課題は失われてしまったのでしょうか。まだまだこの世界にはあまりにも多くの問題があるというのに、それは左翼運動として解決されるべきものではないのでしょうか。もしもそうだとすれば、あの頃私たちが苦しみの中で考え続けた経験は、そのすべてが無に帰してしまつたのでしょうか。それはとても虚しいことです。あの頃のたくさんの真剣さが、たくさんの苦しみが、たくさんの犠牲が——私のような心情左翼としてたくさんの大学生・高校生・労働者・市民から、実力闘争や内ゲバや、果てはあの連合赤軍事件

や革共同戦争なども含めて、様々な闘争の中で、殺されたり、障害を負ったり、自殺したりしたたくさんの活動家に至るまで——そのすべてが無意味だったと断じざるを得ないならば。

(藤純『十七歳 1971』鳥影社、二〇〇二年七月)

(4) 素人、劣等生の史上初の叛乱は専門家、優等生の恐怖を呼び起こした。叛乱の記憶は正史には記されず、ただただならず者の気味悪い狼藉の印象を残すのみで、下層人民の叛史の奥底に語り継がれていく。全共闘運動は日本の文化大革命であり、文化大革命は中国の全共闘運動だった。紅衛兵・劉衛東の次のような感情はまた全共闘を闘った私の感情でもあった。

興奮するなんてもんじゃない、すごく発熱するのだ。(……)わしのような庶民出身の者は、激動する状況の中で、このようにいばらせてくれて、もうたまらなく感激していた。(……)造反は時代の最強音だった。(……)わしの青春、夢、熱狂とロマンは、みな文革にかかわっている。おまえがどう思おうとも、少なくとも文革初期の一、二年間、人民は十分な自由を、ひいては絶対的な自由を享受したんだ。不自由なのは、走資派で、高級幹部の子弟で、特権階層だった。やつらはふだんは高いところにいて、民間の苦しみなんか知らんぷりをしていた。しかし、今やいかなる政治運動とも異なり、世界が逆転し、やつらにもプロレタリアの鉄拳の味を教えたのだ。(……)でも幸福だったなあ。みな早起きして、互いにならずき、ほほえみあった。黙っていても心はつながっていて、連れだつて大経験交流会に出かけた。(……)もしかしたら、わしらは一生、あの一瞬のために生きてきたのかもしれない。(……)わしがどうして自分の過去を否定しなければならんのだ？ あの時歴史を否定しなければならんのだ？(……)わしのような者には何も残っていない。文革の他に、何か追憶する価値のあるものがあるというのか？(……)わしは信じてるぞ。その場にいた一人ひとりとはみんな毛沢東の時代に生まれたことを非常に誇りに感じていたのだ。(……)人はある種の信条を持つべきだ。信条が人を純潔にして、献身の

勇気を持たせるのだ。

- (5) 師岡佑行は『尼崎の戦後史』著者として篠田隆義尼崎市長あて抗議文において次のように書いた(師岡佑行は二〇〇六年六月一二日死去)。

(廖亦武『中国低層訪談録 インタビューどん底の世界』集広舎、二〇〇八年五月)
歴史書は決して過去を美化し、讚美するものではない。現在の事実は常に時間的に遡及したところに根を持ち、さらに未来につながるが故に、未来にかかわる現在の事実を明確に認識するためにはなによりもこれを歴史に問わねばならないのである。不十分とはいえこの本は日本の代表的工業都市としての尼崎市のかかえる主要な問題点の基本的な根を掘り上げる最初の試みであった。例えば、最近新聞紙上にぎわしている尼崎市の公害問題にしても、この本の中に、いかにそれが深刻な内容を有し、かつ禍源が那邊にあるかが示されており、市民はこの本を読むことによって事態をその歴史性と社会性において把握することができる。(……)この本は尼崎市民の大多数を占める労働者の立場から戦後二〇年の尼崎市の歴史を叙述している。それは私自身がかつてこの都市において肉体的労働者であった事実からばかりでなく、歴史研究者としての当然の責務であった。(……)言葉の正しい意味において革新とは、この種の圧力をはねのけ革めて、真実の示すところに従って新たなものを創造することではなければならない。

- (6) 嶋本信子は当該論文の「おわりに」で次のように書いた。

現在、学園闘争が国家権力とその走狗によってよりいっそう激しい弾圧が加えられてきた段階で、我々の闘いがいかにあるべきか。より直接的に我々に対峙してくる大学内のミニ権力に対しても徹底的な怒りと闘いの意志のない限り(それは自己の変革をも内包する)、根本的改造はもとより、小さい問題から根本的改造へ到る道も閉ざされるであろう。

又、徹底的な自由と平等を求める闘いの中にか、自己の解放と真の学問研究の道はないことを、観念的に知つていながら、強大な国家権力の前に屈伏した「教官」へは、謹んで次の言葉を送りたい。やつらは僕を食うんです。そりゃ兄さんひとりじゃ何ともならないでしょう。しかし、だからといって仲間に入ることはないじゃありませんか。人間を食う人間はどんなことだってやりますよ。(……)仲間同志で食いあいますよ。(魯迅、狂人日記)

本稿は、五・四運動のもり上りが弾圧された後、運動がどのように継承されてゆき、どのような闘いの実践の中で人々が新しい武器を見出し出していったかを講究することを目的として書かれた。

〔歴史学研究〕三五五号、一九六九年十二月〕

嶋本はまた、青年中国研究者会議の一員として論文集『中国民衆反乱の世界』に参加、同会議は「論文集発刊のあいさつ」として次のように書いた。

一九六六年の羽田闘争・日大・東大闘争にはじまる、いわゆる新左翼諸党派と学生インテリゲンチアをまきこんだ日本階級闘争(それは大学闘争という文化闘争の形態をとつてたかわれた)は、既成のほとんどすべての研究者・学生の自主的研究会を解体し去りました。(……)これら既成の研究会の解体・自滅の中から、解体と自滅のあり方を問い続けることだけに共感を持つ若干の部分が母胎となり、大学闘争に象徴される文化闘争を、一歩後退した地点で学問、研究、教育の問題として持続的に継承せんとして発足したものです。(……)私たちの共通の学問的姿勢は、もしそうしたものがあるとするならば、中国史研究をおこなう問題意識の原点に自分自身の社会的存在形態と意識形態のすべてをおくこととであり、このことから必然的に研究とその成果が、自分自身の日常生活と生き方(……)を逆規定するものでなければならぬもの、とでもいいうるでしょうか。(同書、汲古書院、一九七四年八月)

歴史をつくるのは誰か 下放、すなわちスタイルの根底的転換Ⅱ文体革命を！（今福龍太・鵜飼哲編
『津波の後の第一講』岩波書店 2012/02/28, pp.146-170 抜刷）* 著者前田年昭 * 2012/03/11 第一版
2014/01/18 組継^ぎ新装版第一刷 2020/03/08 第三刷 * 製本組継本舗 * 発行汀線社 * 362-0022 埼玉県上
尾市大字瓦葺 2716 尾山台団地 2-8-506 * 電話 080-5075-6869 * 言語^コ博客 www.reishensha.com/han/hanhan
roku.htm (繻蟠録) * 俳^イ号臉書 前田年昭 (生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党党员)